

# 境港の歴史

境港には自慢できる伝統や文化がたくさんあります。これらはみんな長い歴史の中で育てられてきたものばかり。あなたも昔の境港を想像しながら、この町を歩いて自慢の伝統や文化に触れてみてください。

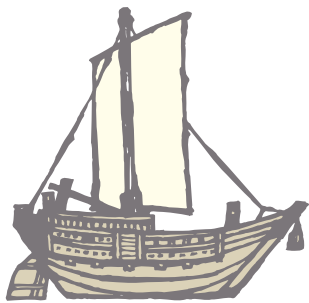


## 港まち「境港」の歴史

島根半島という天然の巨大な防波堤に守られた境港は、港としての条件に恵まれて、古くから賑わってきました。

### 貿易港として

江戸時代の日本海航路の主役・北前船の寄港地、また鳥取藩の藩米を献上するための千石船の港として発展し、その後も船乗りや商人で賑い、山陰を代表する港町として発展しました。明治時代になっても阪神地方の定期船が相次いで入港し、また朝鮮半島、中国大陸との貿易も始まり、山陰の主要寄港地として発展を続けました。たくさんの船乗りや商人が集まり、賑やかだった様子が記録としても残っています。



また明治35年には、港で陸上げされた物資を運ぶために山陰で初の鉄道が開通しました。境港が発祥の地となった山陰鉄道は山陰の物流に大きく貢献しました。

### 漁師まちとして

三方を海に包まれた弓ヶ浜は、海の幸に恵まれ、古くから人々は漁を生活の一つの糧としてきました。特にいわしがよく獲れ、江戸時代からは地引き網を用いての漁が盛んに行われました。

長さ20キロメートルの弓ヶ浜に、100組もの地引き網が一斉に引かれて、その混雑は大変なものだったという話も残っています。

今の境港の貿易港・漁港のなりたちは、歴史が培った大きな財産です。

## その他の歴史

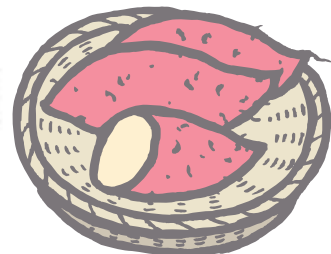
### 境港の農業

砂地で出来た弓ヶ浜半島は稲作には不向きで、それに変わって「綿」と「さつま芋」「白ネギ」が盛んに作られました。

「綿」は延宝四年(1678)、境村の小空新兵衛によって実綿がこの地に持ち帰られ広めたのが始まりと言われています。人々はお米に変わる収入源である「綿」を作るために毎日一生懸命働いたそうです。「白州綿」と呼ばれた境港の綿は、保温力と弾力性に優れ、高く評価され鳥取藩で最高の上高を記録したそうです。民芸品「弓浜緋」は、ここから生まれました。

「さつま芋」は江戸中期享保17年(1732)、西日本一帯が大飢饉に見舞われた時、石見国大森銀山領の代官・井戸平左衛門が薩摩から取り寄せて領内で広めたのが始まりと言われています。以後井戸平左衛門は芋代官と賞され、ここ境港にも芋代官の遺徳を讃える碑が7基もあります。境港に入って来たのは、それより48年後の安永9年(1780)、境村の幸次郎という人が石見国静間村の船頭から芋種を分けてもらい広めたのが最初と言われています。砂地での栽培に適している「さつま芋」は、以後境港の人々の食料として長年に渡り重宝されて来ました。

「白ネギ」は大正末期、繭価の下落が続く、それまで養蚕専業の感があった弓ヶ浜の村々では、「さつま芋」同様砂地に適している「白ネギ」栽培が普及していきました。この「白ネギ」は今でも弓ヶ浜の特産として、全国的にも有名です。



## 昔ながらの「浜弁」

境港をはじめとする弓ヶ浜地方には「浜弁」と呼ばれる方言が残っていて、これも私たちの自慢のひとつです。

みなとまちの風土と歴史を感じさせる「浜弁」は今でもご年配の方々が普通に話される言葉です。

少々乱暴に聞こえるかもしれませんが、気さくさと元気の良さが伝わる「浜弁」をあなたも話してみましょう!

これはいくらですか? ——	こーは なんぼかいねー。
これをひとつください ——	こーを ひとつござい。
ありがとう ——	だんだん。
あなたカニ食べますか ——	かんだガーマクうかや?
ワオ(驚いた時の声) ——	あいきょー
すごいこと、非常に ——	あばかん
調子はどう? ——	どげな?
元気ですか ——	まめなかや。
ちょっと休憩しましょうよ。 ——	ちよっこし たばこ しょいや。